

全建総連ブックレット〈28〉

「地元の木で家をつくる」

東京の木―家づくり協議会・代表

長谷川 敬

## 技術対策活動者会議・講演「地元の木で家をつくる」

講師 長谷川 敬 氏

私は町場で小さな住宅の設計事務所をやっております、日常は事務所設計図を書いているか、所員の設計図をチェックしているか、大工さんから呼び出されて「こんな図面で家が建つか。ちょっと来い」と怒られたり、見積もりを取ったら予算より五〇〇万オーバーして「どっしよう」と、懸命に対策をとって胃を傷めたり、そんなことで追われています。私が普段おつきあいしているのは、大工さん、水道屋さん、電気屋さんといった方々なので、こんな高いところからみなさんにお話することもないのですが、きょうお招きいただいた理由は、多分私が「東京の木で家をつくる会」というものに関わっているからではないかと思えます。この会は、できてから八年を過ぎました。その前に二年ほどの準備期間もあったので、かれこれ一〇年、東京の木で家をつくり続けております。もう一つは、いま地域の木を利用しようという運動があちこちで広がっておりますが、これを横につないで連絡しながら、全体で大きな波に盛り上げようと提唱する人がおられて、これに巻き込まれて三年前から代表みたいなことをやらされておりました。いまは若い方に変わっていただきましたが、全国のことに関わってきたので、きょうはそんな経験もふくめてお話しすればいいのかと考えております。

## だれもが地球環境を考える時代

### 日本人の価値観が変わった

まず、このごろ気がついたのですが、木の家を建てたいという方が非常に増えております。しかも若い人に多いです。これから子どもが小学校に入るころ、子どもが育つ時期の父親母親が、ちょっと家のことを真剣に考えてみたら、「どうしても木の家でなければ」というところに突き当たらしいです。健康問題に関連して、「シックハウスでは困る」が最大の理由なのでしょう。

もう一つは、生活の価値観が変わってきていることです。これは何も建物ばかりでなく、食べ物も健康指向になって、家庭をもつようになって、顔が見える関係での有機野菜を買いたいなどの要求が、はじめて分かるようになる。若いうちはコンビニで何でも買っていた人も変わってきます。さらに、世の中全体が閉塞感に満ちているというか、どこかに健康的出口がほしいという感じが満ちていることがあります。そんなとき、家とか食べ物とかが対象になるでしょう。風が通る家、日が入る家、素足で歩ける家、呼吸する家がほしい。そういう人が非常に増えているのだと思います。ところが、そういう要求が増えたということは、逆にいえば、そのような造りの家が見つからないということでもあるわけです。考えてみると、われわれ日本人の住む家は、ここ五〇年ではがらりと変わりました。いまでは地方都市でも、新建材の同じような家が並んでいますね。これは同じはずで、ぜんぶが同じ発想でつくられているのですから。こういう状況だからこそ、そういう個性的な家がほしいという要求も、また切実な

のだと思います。

こんな状況をもつと社会的に見てみると、シックハウスは困るとか、ゴミを捨てないでとかいう問題の根っこは、考えつめれば大問題なのです。新建材のゴミは燃やせばダイオキシンが発生するようなものもあるし、埋めれば土に有害物質が蓄積する、地下水が汚染される。ところがみなさんの周囲でも、休耕田になった山間の田んぼは何になるかというところ、廃棄物の埋め立て処分地などにされることが少なくない。そこに埋め立てたものから、後でどんな物質が発生してどんな害が及ぶのか、だれも責任を持ちません。他の社会問題と同じように、新建材を使って家をつくって、後の日本人の身体に有害物質を蓄積させているというのも、これは一つの社会的責任なのではないのか。社会から見てたいへんな損失だと思っております。

### 化石資源はもう限界に

別の側面から見れば、このような新建材は、ほとんどが化石資源を原料としてつくられているもので、製造プロセスでもこれだけ化石資源を使うということは、それだけ地球温暖化を促進しているわけでありませぬ。二〜三日前の新聞にも出ていましたが、二〇一〇年までに炭酸ガスがいまの四％増になる。しかし本当は、二〇〇八年から二〇一二年のあいだに炭酸ガスを六％減らすというのが、京都議定書で合意された目標だったはずが、もう九〇年以降一〇％も増えた勘定なのだそうです。そしてさらにいま四％の増加。これもまたたいへんなことです。

私ども、このようなことを、つい統計としか見ない傾向がありますが、事実を直視すれば、まさにわれわれの日常生活が地球に影響を与えているのです。炭酸ガスの空気中での増加が、地球温暖化になるのか逆に寒冷化が進むのか、両方の説があります。ただ、少なくともいまは温暖化の方向に向かっていくようです。今年も暑いです。今日も四月半ばにしてもう夏日。このような気候が続いたら日本はどうなってしまうのか、全然見当もつかないわけです。

私どもの仕事に関係する話題としては、イエシロアリが東京都内にも出てくるかも知れません。マラリヤ蚊が日本でも発生し、ナイル熱が流行するといったことも心配されています。まったく何がおきるかわかりません。こんなことは何とか避けたいものです。

### **木は温暖ガス減らしの優等生**

そんな関連でいえば、われわれが木の家をつくることは、生産過程で石油化学物質の使用を減らすこととあります。さらにいうと、木という資源は、育つあいだに炭酸ガスを吸収して成長するわけです。その量はものすごい量です。木の木材部分の、約半分の量が炭素原子です。つまり一軒の家を建てる材木は、一立米で七五〇グラムの炭素を吸収するといわれます。一軒に直せばたいへんな数になります。だいたい日本人一人が出す炭酸ガスの三年分くらいを吸収することができるといわれているのです。言いなおせば、日本の家は、そこに炭酸ガスを蓄えて放出を防止しているともいえるのであります。また木の家がいいのは、そこに炭酸ガスを閉じ込めて出さないうちに、山では若い木が育っていつて、そこ

でまた炭酸ガスを固定していることです。ダブルの効果があるのです。木は、もしむかしのように壊しても捨てないで別の利用を考えれば、ずいぶんながいあいだ炭酸ガスを抑制することができます。これが化石資源を使ったときと正反対の働きになるので、社会的、環境的に見て非常に優秀な素材なのです。われわれの健康によいということだけでなく、たくさんのおい効果があるのです。

## 作る側と使う側に大きなズレ

### 消費者の疑問も増えている

ところが、このように木は一石二鳥三鳥の素材なのに、これが使われない。なぜかといえば、社会の成り行きというか、そういう流れがつけられてしまっている。多くの木の家を望んでいる人が何をいつているかという点、「どこに頼んでいいのか分からない」というのです。町場の工務店さんに聞いても「木の家は高くつきますよ」といわれてしまうというのです。大手や地域ビルダーなどに頼みにいくと「それはうちではできません」。どこに頼めばいいのか、ということなのです。頼むほうもいいとはいえない面があります。「木の家がほしい」といつておきながら、木の家がどういう性質を持っているか全然勉強してない。だから、実際やっているうちにひどいことになる場合もあります。たまたま床に死に節があつて、はじめはついていたのがある日落ちてしまった。これをたいへんな欠陥のようにわかれて「床張り替える」などといわれた、などの話があります。梁は夜中、びしっという音がしますが、「家が壊れる」といわれた人もいます。消費者は木の家につきあい薄くなったので無理を言う。それ

につれてプロも怖くて手が出せないという面が出てきています。

また、木を扱うのは手間がかかる仕事です。木ばかりでなく、自然素材を扱うのは時間がかかるものでもあります。なにせ家は安く早くというのが世の中のスタンダードになっているなかで、ちよつとでも手間がかかると「これは駄目」ということになってしまふわけです。手間がかかるということは儲からないことなので、町場の工務店さんも、どちらかというと新建材主体で、集材材とか合板とか、工業化された木を安心して安全、手間もかからないというので使っていることが多いわけです。

### 互いに話し合うことが少なくなつた

そんなふうには、消費者とのあいだにずれができています。しかし、「安く早く」という問題を考えてみると、消費者がほんとうに望んでいるものが「安く早く」でできるものなのか。よくよく話し合つたうえでできないといったのか、お金の要素だけでできないといったのか、その辺がよく分からないわけです。私も設計者ですから、よく見積もり話に入っていくのですが、最初の話に非常に時間を費やします。設計図そのものよりも、そのあたりでの理解を得るまでの努力が、非常に大事です。そこが分かつてもらえれば、大部分は金のない人ですから「やはり余り余分には出せません。でもやはりどうしても木の家がほしいんです」といいます。こうして腹をくくつてくれれば、それなりにつくりようもあるわけです。「それなら、システムキッチンなどやめなさい。一〇〇万下げられます」。木製建具もこの際さし当つて不要な所は断念してもらつて、そのかわり全部無垢の木で骨組みから建てましょう。いろんな交渉のしようが出てくるものです。難しい点は素人には分かりません。そこをみなさんがしっか

りやっであげれば、お金の額ばかりでなくこつちを選ぶ方がたくさんいるはずで

### 売る側の反省も多い

このあいだ、ちよつと面白い話を聞きました。NPO「国産材」というものをつくられた方がいるのです。東京木場の大きな材木屋さんで、榎戸さんという方です。彼が自分の庭に、ベイツガ、ホワイトウッド、ヒノキ、スギの四種類を置いておいた。二種類は外材、二種類は国産材であります。ワンセットは土に直接立てて、ワンセットはコンクリートの上に置いて、ワンセットはその上をビニールで覆った。どうなるか見ていたら、半年たたないうちに外材はシロアリに食べられはじめた。国産材は白太のところが多くなめられた。なめた程度で食べられはしなかった。一年もたつと、外材はかなり食べられてしまつて、国産材も食べられはしたが、白太の部分だけで赤身は大丈夫だった。しかも国産材のほうはスポット的に食べられているだけで、それほどひどくはない。約二年たつたら外材はなくなつて、まったく土になつてしまつた。そして外材がなくなつたら、次に国産材が食べられはじめた。食うものがなくなつて、食いたくはないがないので食べたのでしよう。しかし崩壊するようなことはなかった。

### 専門家は本質的な問題を避けてきた

「非常に単純な実験だったが、自分たち材木屋は、木が安いが高いかばかりいつて、国産材と外材がどう違うのかなどは言つてこなかった。逆に国産材を外材に合わせて安くしなければいけないと考



安く売ってきたが、そのために国産材はこんな状況になってしまった」。実際に国産材は、四〇年前の値段の半分なのです。給料は多分五倍くらいになっていると思いますが、それと比べればびっくりするほど安いのです。

榎戸さんはいいました。「国産材を外材と同じ値段で売る必要はない。むしろお客さんに選んでもらったほうがいい」。私どももそうありたい。「こっちなら坪六五万かかります。新建材なら五〇万くらいでできますが、こっちは……」といった具合に、お客さんに選んでもらう。その場合はいまのシロアリの話などをしていくと、せつかくお金をかけて建てるのだから、多少高くても国産材というふうになると思います。金がなければ、いろんな調整の仕方があるものです。そんな点でお客さんと理解しあう。医療でいうインフォームド・コンセントを得てつくる。そんなやり方が、いまはわれわれの回りからも消えてしまったのでしょうか。

どちらかといえば、家づくりは住宅企業が宣伝と営業で、じつに上手に仕事を取りながらシェアを増やしていったので、私たちまで、ついそういう方法に乗ってしまいがちです。「やはりモデルハウスを建てなければ駄目なんじゃないか」なんて、お金がかかる方法で宣伝を考えてしまいがちですが、そうではないのではないか。地域でやっている工務店さん、大工さん、職人さんは、とくにお客さんに対してしっかり理解をしてもらうこと、その上で上手に家をつくってあげることが大事だと思っております。そういう生きかたがあると思います。しかしいまは、ここずっと続いてきた新建材の時代のなかで、忘れられてきたのではないかと考えています。

## いま、対話を取り戻すとき

ところで、お客さんがいろいろな知識を失ってしまったことと、われわれが営業の仕方を間違えてしまったことは、同じ原因があると思っています。つまり両方のコミュニケーションが切れてしまったことにあるのです。断絶した中で「安く早く」という話が横行するからいけない。私などもよく経験するのですが、「東京の木」を使っても、うまく行かない場合があります。木が乾いてないのです。どうしてもこの木は、あと三カ月は乾燥させないと使えない。そんなとき、お客さんにきちんと説明すれば「では三カ月待ちましょう」といつてくれるわけです。必ずしも家を建てるすべての方が、一刻も早く建てなければならぬ事情をお持ちとはかりはいえないのです。ただ常識的に、三カ月で完成と言われるから三カ月で仕上げるとなる。そんな巷の説を信じているだけの話なのではないでしょうか。値段も同じです。そういう点を、懇切丁寧に説明してこなかった私どもも悪かったし、建てる側にとっても不幸なことでしょう。

## 近在の木と地球環境と

### 日本の木、近くの木を使おう

もっ一つは、どうせ木を使うのならば、近くの山の木がいいのです。何でいいのかというと、近くの

山の木のほうが、その地域の気候風土に合った性質を持っているからです。しかし同じ日本ですから、この面で遠く、近くにそれほど違いはないはず。秋田の木を東京で使っても、別に問題ないのと同じです。ただ、近くの山の木を使うということは、その地域の環境を守るということに結びついているからなのです。炭酸ガスの放出をくい止めるのに一番貢献しているのは、山や森です。山や森の木は、その地域の水資源を涵養してきれいにしたり、山の崩壊をくい止めたり、そういう治山治水の役割を持っています。

その山や森の保全を担当する林業が健全ならば、木はそういう役目を果たします。ところが林業に専門業者がいなくなれば、莫大な金を払って、公共事業として山を守らなければならぬ。これも多分不経済なことなのでしょう。とすると、その地域の人が山や森の木を伐って大工さんに引き渡し、それで家が建ち、そのお金で山や森を保全する人の生活が保障されるといった経済の連環に乗れるならば、これが理想的な地域経済の輪になると思うのです。そういう面からいっても、近くの木を使いたいものです。

### **わが国経済が地球を滅ぼす？**

ところで、木をめぐる環境問題を、今度は世界規模に引き伸ばしてみるとどうなるでしょうか。私はこのあいだ、ロシアとインドネシアの専門家の講演を聞いたのですが、いまロシアから日本にきている亜寒帯林の木は、少なくとも四五%、多く見積もれば七五%が盗伐なのだそうです。本来ロシアでは、あの辺りの木を一度伐ると二度と林勢が戻らない。腰くらいになるのに一〇〇年かかるといわれていま

す。だから伐採を禁じているのに、国が大きすぎて地域マフィアみたいなものがでてくれば、何の障害もなく切られて輸出されてしまうというのです。地域警察も、軍隊までもが一緒になって、木を伐つて売り払う。しかもこれが一度外国に出ると、ちゃんとした輸材材として通用しているという話をしました。

木を伐つたあとは、太陽が地面によく当たる。永久凍土が溶けて水たまりが随所にできる。すると、氷の中に閉じ込められていたメタンハイドレード（冷凍固体メタン）がいつせいに噴き出してくる。これはたいへんな地球温暖化の要因だそうです。私もはただ何となく、亜寒帯のマツの素性がよいので、下地材などに使っていますが、そのことによってそんなたいへんなことがおきているなどは、思ってもみなかったわけです。

インドネシアでも同じように、五割以上が盗伐材だそうです。盗伐によって一九九〇年から二〇〇〇年までの一〇年のあいだに、少なくともなくなった熱帯雨林が、さらに三分の一減った。そういうことが、日本では何の意識もなしに、安い高いだけで存在している。われわれが使っている外材が、われわれの生きる地球をそれほど壊しているのです。われわれが、少なくともみんなに見える山や森の木を根こそぎ伐れば、大きな社会問題にされるでしょう。だから恐らくそんなことはおきないと思います。そういう意味からも、地域の木を使っていくことは、絶対やらなければならぬことだと思つのです。

## 経済成長が山を捨てさせた

### 山の手入れ人がいなくなった

では、そういう木を使おうといったとき、いま山はどうなっているのでしょうか。いまや木材のコストが安すぎて、山を保全する人がいなくなってしまうたのです。林業を担っていく人が減ってしまいました。だから山がなくなつたかというところ、みなさんが見る通り、山は青々としています。ただ、そばによつてよく見ると、手入れがしてありません。あれは、きっと四〇年、五〇年前に密植した結果、いま見えるように茂っているだけ。本来は間伐する必要がありますが、してないので、林床が真っ暗になつてしまっています。下生えがなくなつて、瓦礫の山のようになつてしまします。すると栄養分がどんどん流れてしまい、木はやせて山も保水力がなくなつて、水の涵養もできなくなります。木はあるのだが、まずい状態になっている。これがいま、日本全国でおきている山の状態です。日本の山の木を使おうといつても、山が再植林される状態にならないとまずいのです。

もう一つ、国産材が使われない理由には、山のほうで木を出していく体制ができてないことがあります。林業は放棄されてしまったのです。日本の林業は、一〇ヘクタール以下の人が九割以上を占めるというように、小地主が多いわけです。とくに最近では相続問題で、小さな森をさらに分割するので、いつそう小さくなつてしまします。そうなれば、林業は成り立たなくなります。いまは補助金で、辛うじて

間伐だけとか枝打ちだけをやるなどで行われているようですが、経営としての林業は、ほとんど壊滅の  
状態です。

そういうことで、みなさんがいま買いにいつても、家一軒分の梁材、柱材、内法材などがそろとうい  
うことは、本当に少なくなっています。これも非常に大きな問題です。

### **林業構造改善事業は企業向けだった**

もう一つ、日本の林業政策が偏りすぎてきたことがあると考えています。外材があつたために、「値  
段を下げる」というのが至上命令になっていました。大量生産のかたちで大量伐採をやつた。これを効  
率よく製材しろ。人工乾燥で早く市場に回せ。集成材にしても市場に出せ。いわば加工した工業製品  
のようにして、使いやすくして早く出せ、しかも値段も下げるといふことで、国の林業構造改善事業の  
金を使って、地域の小さな製材所はつぶしてまとめ、大きな工場に直した所が多いのです。では、そ  
れで木が売れたのかというと、そうではなかつた。外材のほうはまだまだ安かつたのです。

それと値段が同じでも、外材のほうが使いやすいかつたという面がありました。品質が揃つていて大量  
の品ぞろえができて、企業が品質管理をして出してくるので使いやすい。ホワイトウッドとかレッドウ  
ッドなども、スウェーデンの方できちん品質管理をして出してくれます。そういう、いわゆる住宅産業  
的な家づくりに対しては、企業のシステムのほうが強いわけです。

日本の木は、どうしても山が小さいし地域的に南北に広いので、地域によつて木の性質も違うし、い  
わば少量多品種的なのです。そのような木を使うのには、あの大量生産方式はまずかつたと思います。

生き残っている所もあるとは思いますが、全体的には無理だったと思っています。みなさんが買いにいったも、柱だけならあるが他はないということが多いのではないのでしょうか。そういう意味では、山側も何とかしてもらわなければ、地域での家づくりはなかなかうまくいかないのです。

## 木を使う組織をつくらう

### 「東京の木…」の生い立ちについて

それぞれ、生産者は値が合うなら木を出したいといっている。工務店さんは木を使いたいといっている。まして消費者は、木の家がほしいといっている。なんとかこれを結び付けて、木の家づくりがしつかりできないか。これが地域の木の家づくり運動です。今後どうしたらいいのかを考えてみます。

まず組織の性格ですが、地域によってぜんぶ事情が違出し、担い手によっても違いますので、いろんな形態が可能です。ただ、まずは志を同じくする同志が結集し、顔の見える関係をつくることだと思っています。われわれ「東京の木で家をつくる会」なども、一番のきっかけは以下のような事情でした。九八年だったかに大雪があつて、山の木がずいぶん倒れたことがありました。その後、木を起こしたりする人がいないということで、せめて山で遊んでいる連中が掃除だけでもしたらどうか、という提案があつて、日曜林業で山に入る人たちが出てきて、林業の方から教わったりしているうちに、「東京にも

こんなに木があるのだから、これで家が建たないものか」ということで、そのなかの有志がはじめたものなのです。だからスタート時点では、わりと同じような考えの人が多かったわけです。

もう一つは、仲間それぞれが木造住宅を設計していたことがありません。そこで馴染みの工務店に呼びかけて、東京の木を使ってもらったのです。そういう意味では、あまり苦労もなくていいのです。もともと東京にも製材屋さんはたくさんありました。いま、ほとんどが辞めてしまっただが、でもまだ何軒かは残っています。そういう所に頼めば、日常の作業としてわれわれの木をひいてくれました。そんなふうには生産はつながっていきませんでした。あとはお客さんだけでいいです。そこはわれわれの事務所に「木の家をつくりたい」といつてくる人に持ちかけたりして確保していいました。

一度チームができたところで勉強会などをやりました。ここには林業家にも参加していただいて話を聞いたり、木の家づくり方の話、大工さんの技術の話など、それぞれの分野の方の話をそれぞれが聞くという勉強会でしたが、これに一般の人にもきてもらいました。ここでは、「木の家ってこんなふうにつくるんだ。でも問題はここにある、いい点はここだ」といった点が分かる。その上で客になるときは、かなりの勉強をしたことになりません。

もう一つ、いくら一緒にやってやるといつても、製材屋さんは少しでも安く山から買うと得になる、お客さんもなるべく安くつくってほしい、工務店も木は安く仕入れたほうがいい。それぞれ、相手と手を結べば平和というわけにはいかない関係にあります。けれど、とにかく大事なことは、山の木を生かしながら、お客さんのために本物の良質な家をつくるのが最大の命題です。そのなかで、どうしたらいいかという相談はできません。そんな点を心掛けながら軌道に乗せていくのが、このような組織のあり



方がかと思っています。

### いろんなタイプの組織があつてよい

いろんなやり方があるはずですよ。もつと大きな商売をやっている方は、もつと大きな材木屋さんと組まなければならぬ。たとえば山長さんという、和歌山でも有数の材木屋さんがいますが、あそこは自社だけで一万ヘクタールくらいの山を持っているといわれます。もちろん製材所、乾燥場、プレカットの機械など一連の設備を持っていますから、注文すれば、檜の柱でも何でもそろっていただけます。東京にある「匠の会」は、ここと手を結んで木の家づくりをやっています。ただし「匠の会」は板材は栗駒から買うとか全国的に展開していますが、しかし日本の木を生かしていることには間違いないわけですから、こういう大きな連携もあり、と私は思っています。それぞれのような業態で、どうやるのかによって、グループのつくり方は違っていい。グループが地域でたくさん生まれてもいいと思います。いろんな方がいて好き嫌いもあるから、いろんなグループが生まれてもいい。なるべく気心の通じた相手と組んで、できれば山側、製材所、材木屋さん、設計者、工務店などが手を組んで、顔の見える関係でやることが大事かと思っています。

ところで、顔が見える関係ということはある程度ふところの中もガラス張りにしなければいけないということでもあります。どこにいくらくらいお金がかかるのかも、ある程度公開できなければ、信用されません。いままで一番お客さんが建設関係者に不信を持っていたのは、そこでした。だから公開したという姿に、お客さんも巻き込まなければ駄目でしょう。お客さんがそういうことを知っていること

が大事だと思つたのです。ここは地域の家づくりの、一つの課題ではないかと思ひます。それを私もは、「地域の家づくりネットワーク」と呼んでいます。

### 行政と連携するためにも横のつながりを

その次は、できればつくられたグループを横につないで、地域協議会などといった名称で、横の連携が取れるようにされることが大事かと思ひます。たとえば、いま行政がそういった運動に補助金を出そうという動きがあります。県産材を使つたら利子の何%を補給するとか、いくらの補助金を出すとか、柱を八〇本くれるとか、いろんな補助があります。ほとんどの林産県がその種の補助を持っています。けれど、特定のグループにだけ出すのはまずいという判断をする場合がある。そのような場合に複数のグループの協議会のような組織があれば、そこになれば補助が出しやすいのではないのでしょうか。グループとしても、自分たちのパンフレットをつくる際に補助が一〇〇万、二〇〇万出るとすれば、これは楽です。大きいのは、対お客さんです。消費者に対して、行政も一緒になつて運動を支援してもらえらるわけです。一緒にやるのが大事だということです。たとえば会場を借りるときも、私どものような小さな団体が会場の使用料を払うことは、なかなかできないことですが、行政がもつといくつものグループを集めて開催・後援してくれれば、非常に助かります。お客さんだって、あるグループだけの宣伝ならば信用しないが、そうではなく、地域全体のグループが公平に出ていて、大きな地域づくり、健康な家づくり、良好な環境づくりなのだというところを一緒に訴える機会があれば、消費者とも共同の輪が広がるでしょう。行政を巻き込むためにも、横の連携をつくるのが大事だと思ひます。

東京では、いま都が音頭をとって「東京の木家づくり協議会」ができて、まだ手探り状態ですが、もう三年やってきています。これは都が、いまいったような意義を認めて、結成に踏み切ったものであります。そんな地域の家づくりの協議会ができるといいと思います。

## 山がいまたいへん、助ける手だては

### 林業を成り立つ産業にするために

山のことで補足します。どうもいままでの家づくりでは、材木屋さんから後の工程がネットワークに参加しやすいのですが、端的にいえば、製材屋さんとか材木屋さんは、木が売ればそれでいいという立場に立ってしまいます。また国産材を使おうとかいった運動を理解してくれる人はいますが、それを運動にしていく側でさえ、「材木はどこが安いか」といった競争になってしまつて、安いところ安いところと選んでしまう傾向があります。それでは結局、山にお金が戻りません。するとこの運動は長続きしません。必要なのは、山までふくめて成り立つ運動。家づくりのネットワークの各メンバーが、それぞれ経営として成り立たないと長続きしない。そういう仕組みもちゃんとつくっていくのが、今後の一番大きな課題ではないかと考えています。

それは不可能ではないと思います。たとえば、いま、スギの並材の丸太一立米は八〇〇〇円くらいから一万五、六千円ですが、これを三万円、三万五〇〇〇円にすると、何とか林業が成り立つそうです。

いまの価格を倍にしても、家一軒分では、ふんだんに木を使って一〇〇万前後しか上がりません。それだけのお金を個人が負担するのはたいへんかも知れませんが、いろんな補助金などをそれに結びつけるようにすれば、あるいはお客さんも理解をしてくれて、自分の子孫のために環境を改善し、木の快適な家が手に入り、しかも顔の見える人の山のできる木ということになれば二〇〇三〇万を出してもいいという人はたくさんいると思います。そんな関係をつくりながら、山の木を使うことが、これから大事になっていくのではないか。いまはそこがなかなかできないのです。まず安いか高いかで決まってしまうのですが、そこまでやっていかないと、この活動はうまくいかないと思います。

### 活動家ですら手放す山の悲惨さ

余談になりますが、NPO「緑の列島ネットワーク」というのは、そういう関係の人たちが集まって立ち上げた連合組織です。全国いろんな所から、林業関係者も設計士も学者も、いろんな職種の方が入っていますが、そのうちの一人で、設計者ではあるが山持ちの方が、このあいだ山をぜんぶ県に寄付してしまつたのです。半端な面積ではありませんで、八〇〇ヘクタールとかいつていました。相続する手だてがもうなくなつてしまつたから、というのです。その相続税を払うには、いま持っている山も木も、自宅すら売つてもまだ足りない。木が一〇〇年生の檜でもあれば何とかなつたかも知れませんが、植えてちょうど五〇年程度の木が多いので、追いつかない。結局持っていてもどうにもならないので、山を持たないという方を選択してしまつたというのです。私どもの運動の仲間ですらこういう状況ですから、いまの山はたいへんなのです。

## 森林経営者を運動に入れよう

でも、そんな中で、では山持ちはどうやって食べているのか。ほとんどの人が兼業を持っています。あるいは大きな山持ちならば、もともと資産家なので、いろんな事業をやっています。要するに、だれも山で食べていない。これがいけないのだと思います。みなさん山の人も巻き込んでやろうというのならば、「おれは山をきちんと経営する」という人をぜひみつめていただきたい。そういう方と手を組んで、はじめて持続的なネットワークができるのでは、と思います。

これも余談ですが、山形県・酒田市に一軒、家を設計しました。その家の木を出してくれた人が「おれは林業でちゃんと暮らしている」、正確には、林業もふくめて暮らしを営んでいるということだそうです。私はそんな話を林業家から聞いたのははじめてだったので、驚いたわけです。「何でやっていただけるのですか」。その方は農・林兼業なのです。農業もけっこう大きくて、何町歩も有機米をつくって、全部家族労働で、契約した消費者に売っているのでいつも完売だそうです。山は農閑期に入って、しっかり手入れしている。お祖父さんの代から山に入っているのです。山の作業もちゃんとできるといっていました。山にはしっかりと道がつけてあります。自分でつくったのだそうです。山の作業をする重機も、けっこう一通りそろえてありました。つまり自分で山を伐って出して、製材に持っていく。挽いた材料は持って帰ると、自分の納屋を改造した倉庫で乾燥させて品質管理もやってしまう。お客さんに届けるのも自分でやる。

そうすると、本来だったら人手を借りて、その分お金が飛んでしまつて懐に残らないところを自分が

やる。それで何とかやっていける、というのです。山形あたりの家は大きくて、五〇坪ほどの家なら木は五〇立米ほど使います。一括した最終価値では、一立米八万円ほどになりますから、一軒で四〇〇万円。製材屋さんに払うのは、せいぜい一〇〇万円程度でしょう。三〇〇万円が自分の懐に入る計算です。一部は生活費にしても、かなりの額が山に返せるわけです。それで手入れをしているというのです。

彼の山は、今後もずっと続いていくでしょう。そしてつくる大工さんは、彼の在所のほんの近在にいる方々。私がそんな方にどうして頼まれたかというところ、木の家を設計できる人が近くにいないからというのです。そうなのです。学校では木の家など教えません。私が余所でつくった家を見て、「こういう家こそ本来の家。自分の山の木をこんな風に生かしたい」ということで、モデル的に一軒つくれということで、一軒できたから、この次からは地元の設計者がやることでしょう。

### 山の復活は地元経済に波及効果を

そういうことで、これは地域ネットワークの原点みたいな話ですが、こういう形が全国津々浦々にたくさんできると、地域の木の家づくりができるのだと思います。このシステムが理想的なのは、金がぜんぶその地に落ちることです。他にいかない。彼のところにまず三〇〇万円落ちるが、製材所にも落ちる。地元の大工さんにも、左官さんにも、設計事務所にも落ちることになります。地元でぜんぶお金が回るというのは、これは大きいです。たとえば二〇〇〇万の家を地域の人たちで二〇軒やったら、四億円の金が回る。この経済的波及効果はけっこう大きいです。そんなふうに考えると、地域の資源で

地域の家をつくるというのは、経済的に有効な地域経済の柱になる得ると思います。

さきほど、景気が上向いた下向いたといった話がありました。私どもの時代で一番問題なのは、景気はよくならなければ困るのだが、景気がよくなればわれわれの子孫の将来が危うくなる。そういう経済の仕組みになってしまっていることなのです。これは経済の形態そのものを変えていかないと駄目な時代に来ているのだと思います。そのうち一つの選択肢が、私は地域の木の家づくりではないかと考えているところです。

### ほかのネットワークとも協同して

酒田市の例の林業家は鶴岡市に住んでいますが、この方の周囲には、いい人が集まってあります。近所でユースホステルを経営している若者がいます。ユースホステルは忙しいときは忙しいが、暇なときもけっこうあって、そこを利用して、地域の人を集めた「森の人講座」というものをやっております。酒田市、鶴岡市などの方々が集まってくる。この林業家の山を使って森林の勉強をしたり、フィールドワークなどもやっていると思います。そして間伐を手伝ったりいろいろなイベントをやっている。そうなる、いろんな人がいつそう集まってくるでしょう。その人が、今度はお客さんになるということです。営業宣伝しなくても、次々に家を建てたい人が現れる。またこの林業家は、有機米をつくっていますが、それを食べるお客さんも増えていくわけです。そのように、いろんな糸口からつながりが出てくるわけです。地域ネットワークというのは、本来そういうものなので、本当に地域のためになるものですから、

他のネットワークとも協同できる性格を持っています。だから、福祉のグループとか環境を守る会、子ども教育を守る会、いろいろなグループと横につながれる。そういう点にも目を配る、いわば未来型というか、次の循環型社会をつくるための道筋の一つという意味で、誰もが否定できない活動ではないかと思えます。

## 木材の品質管理とストックは難しい問題

みなさんこれだけの話を聞くと、「東京の木で家をつくる会」がいかにも順風満帆でスタートしたように感じられるでしょうが、実際はその逆でして、なかなかうまくいきません。何が問題なのかというと、一つは、材の品揃えとストックが非常に難しいことです。家一軒分の多種の製材にに応じてくれる製材さんはどうしても零細企業になりますし、もともと木の乾燥については製材屋さんの仕事ではない。いまは製材屋さんでも大きなところは柱材などの単材は大規模に人工乾燥をやるようになっていますが、小さいところでは設備投資が無理ですし、その意味もない。ストックもいつ売れるかどうか分からない材木を挽いておいて半年も寝かすのは、たいへんなことなのです。

「東京の木で家をつくる会」の場合も、始めは材の用意ができてないために、契約ができたから明日から着工といっても、木が間に合いません。施主さんが前から頼んでくれた場合には、六カ月ほど前のうちに製材に出して、木拾いだけは先にやっておいて、お金も多少出してもらってデポジット（預り保証金）もつくって製材作業を優先することもありました。しかし、製材所の努力のお陰で今は、かなり



手際よく材を揃えてくれますし、注文する方もある程度の時間をみるように努めています。天然乾燥を主にするわけですから、そんな速く出来るわけがないのです。「東京の木で家を造る会」があまり伸びないのはこの辺りに一つの原因があるのかもしれませんが。しかし、手刻みの木の家をじっくりと造ることに賛同する人の輪を少しづつ広げて行けばよいと思っています。

もう一つの問題は、林業が成立つように山にお金を還流するという問題です。これは、原木の市場価格の問題、林業の担い手の問題などが複雑に絡んでいて、どうしてよいものやら解決の糸口にも達しません。

町の人が地元の木で家をつくってくれるから助かる。これで生業の林業が続けられるという状況にはほど遠い現状です。しかし、造り続けて、少しづつ増えて行けば、又事情は変わってくるかもしれません。

## 木の乾燥について

一つ申し忘れたことがあります。（スライド上映で）いまご覧に入れた家は、みな手刻みの在来木造ですから、材木も適度に乾燥していれば、大工さんの腕と経験でなんとかカバーしてできるのですが、いまは木材は含水率が一五%、二〇%でなければいけないといわれています。しかしこのような乾燥の数値で安定して木を出荷できる場所は、とても少ないのです。出せるのはどこかというと、構造改善事業を行って、新鋭機械を入れて乾燥釜も入れて、温度管理も十分にやれる設備を持った所です。

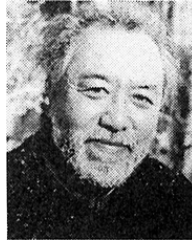
いっぽう、なぜ乾燥した木が求められるのかというと、大きな商売をしている企業が、このように低

く安定した数値でないと買ってくれないからなのです。プレカットで合理化した工法の場合、木材が乾燥してないと駄目です。しかし家づくりにはいろんな選択があるので、少し時間をかけて手刻みで造る工法なら、墨付時には、三〇%から四〇%くらいでよいと云われています。刻んで建て前をする頃には、二五%か三〇%になっているようです。それより高温で短時間に乾燥することによる木材の劣化、つまり樹脂が脱けて、脆くなることの方が恐ろしい。色艶もなくなるし木が可哀いそうです。

全国には、地域の山林を相手にした零細な、しかし、確かな技術をもった製材所が未だかなり残っています。そんな製材所から出る木を自然乾燥して、地元の職人の手でていねいに家を造れば、お客さんにも一番良いことになるのではないのでしょうか。そして、小規模の山林も生かされる。

家の善し悪しは、どのくらい携わった人の気合、気持ちが入っているかどうかでずいぶん違うものです。そのあたりをお客さんに理解してもらって、ぜひいい家を見る目を養ってもらいたいと考えているところです。

この講演録は、二〇〇四年四月二十日～二十一日「全建総連技術対策活動者会議」において行われた講演の要録であり、講師の許可を得て、全建総連・企画調査室がまとめたものです。



長谷川 敬（はせがわ ひろし）

略 歴

- 一九六一年 京都大学工学部建築学科卒業
- 一九六四年 同大学院工学専修課程終了後、渡米。パオロ・ソレリに師事。  
米国アリゾナ州でアコロジの建設に参加。
- 一九六八年 都市建築設計研究所入所。
- 一九七四年 一級建築士事務所長谷川敬アトリエを開設。住宅の設計を続けて現在に至る。

主な役職

東京の木 家づくり協議会・代表